

校長室だより

# 共学共高

第  
33  
号

令和4年11月14日発行

発行責任者

白梅学園高等学校長

武内 彰

## ～修学旅行特集その1～

本校の修学旅行は、3つのコースを設定し、1年次に選択してもらう方法をとっている。その3つのコースとは、「オーストラリア・ケアンズコース」、「北陸・関西コース」、「沖縄・石垣島コース」である。現2年生（58期生）の修学旅行では、4月の段階でケアンズコースの実施を断念し、沖縄・宮古島コースで代替することとなった。このうち、私は、沖縄・石垣島コースの引率を担ったので、その報告を数回に分けてさせていただきたい。

11月7日（月）から11日（金）までの4泊5日の日程であったが、教員の集合時刻が羽田空港第1ターミナルに午前6時30分であったため、念のため、私は京急蒲田駅近くのホテルに前泊することにした。午前6時過ぎに集合場所へ到着すると、すでに学年主任のS先生と数名の生徒たちが先に到着していた。自宅が遠方であるために、私と同様に前泊した生徒、高速バスの時間の関係で早く着いた生徒たちであった。156名の参加生徒全員が、集合時刻である午前7時30分の5分前には集まった。これまでの学年の「5分前集合」の事前指導の賜物であろうか、生徒たちのきちんとした行動に安堵した。

羽田空港を飛び立つ機内では、初めて飛行機に搭乗する生徒たちであろうか、離陸の瞬間には多少の悲鳴がこぼれていた。無理もないことである。なかには保護者の方に「大きな声を上げてはだめよ。」と言われてきたので、「我慢した。」生徒もいたことが後に生徒たちとの会話からわかった。2時間余りのフライトで、那覇空港へ着陸した。到着後は、バスによる移動である。最初の訪問地は、「ひめゆり平和記念資料館」である。まずは、ひめゆりの塔において、生徒たちが事前に作成した「千羽鶴」を奉納し、その後は号車ごとに献花し、亡くなられた方々へ祈りをささげた。この場所で生徒たちと同年齢あるいは年下の女学生たちが命を落としたことを、生徒たちはどのように受け止めたのであろうか。



その後、記念ホールにおいて、沖縄戦当時10歳で終戦を迎えたT氏から平和講話をしていただいた。60分間にわたり、スライドを織り交ぜながら、信じがたい体験を熱く語っていただいた。私自身もそうであるが、涙なしには伺えない悲惨な状況であったことは生徒たちに十分に伝わったことであろう。私自身、T氏の「戦争では正義も何も通用しない。現代社会において成り立っている私たちの常識が全く成り立たない。」という趣旨のお言葉を重く受け止めた。壕を出て、どこに行けばよいのかわからない状況、どこに敵がいるのかわからない状況下でただただ歩き回って身を守る日々、そして戦火がふと消えた終戦の日のこと、わずか10歳のT氏がその胸に受け止めきれないほどの凄まじい体験をされた現実が傾聴する私たちの心に届く。「戦争は私たちの日常のすべてを変えてしまう。」のだと。講演後は生徒会執行部の生徒たちがお礼の言葉をお伝えし、花束を手渡し、感謝の気持ちを表した。

次の訪問地は、沖縄県平和記念公園である。資料館内及び平和の礎を見学した。私も生徒たちと一緒に回ったが、生徒たちはしっかりと展示資料に目を通し、何がそこで起きたのか、そして戦争を体験したさまざまな人たちの言葉に見入っていた。あまりにも私たちの日常と異なりすぎて、胸を痛めた生徒たちも多かったことであろう。世界情勢は不安定であるが、次代の平和を担うのは彼女たち自身なのだ。大いに想像力をはたらかせて、自身や家族の幸福を追求すると共に、人類の発展に貢献してほしいと願うばかりだ。



再びバスに乗車して、宿泊先のホテルへと向かう。食事はbuffet方式であった。好きなものを好きな量だけ選べるので、生徒たちには合っているようだ。デザートも豊富で、よく食べている生徒が多かった。

夜の室長会議では、室員の健康状態や翌日の行程における留意事項等の確認が行われる。室長が「みんな元気です。」と言ってくれると、私もほっと胸を撫でおろす。明日もいい1日となりますように。おやすみなさい。午後10時30分消灯である。(つづく)



(共学共高とは：本校のディプロマポリシー（育てたい生徒像）の一つで、「共に学び、共に高め合う」生徒の姿を表す)